

「大学・地域共創プラットフォーム香川」
令和4年度第2回地域活性化部会（web 会議）議事概要

日 時：令和4年6月17日（金）10:30～12:05

出席者：別紙（部会資料「01.出席者名簿（R4第2回地域活性化部会）」）のとおり。

※香川県中小企業家同友会は大森事務局長、坂出市は松良係長が代理出席。三木町は欠席。

議題1 前回議論の振り返り

※資料（P2,3）に基づき、前回議論の振り返りについて説明。

議題2 連携事例の共有

※あらかじめ質問のあった6事例に対し、関係5団体より回答を行った。

1 香川短期大学（P9）

（幹事）

学生が考案した食品レシピの紹介や、商店街でのサンプル品の配布をしたとのことだが、そうしたこと以外に幅広くPR・展開をしたのか。

（香川短期大学・牧野委員）

各種媒体で活動状況を紹介した。主には紙媒体になるが、例えば短期大学の広報誌のほか丸亀商工会議所新聞、日本農業新聞、JAの広報誌などに丸亀の活動事例を紹介している。

2 香川県中小企業家同友会

（1）セトウチメーカーズと四国経済産業局・自治体（東かがわ市）の支援連携（P10）

（幹事）

注目ポイントとして、地場のライバル企業間の技術・ノウハウ連携とあるが、ライバル企業間のハードルをどうやって超えていったのか。

（香川県中小企業家同友会・大森委員代理）

東讃エリアの製造業は基本的にはOEM生産する企業がほとんどで、市場や顧客、発注先が重複しており、そういった意味でのライバル関係にある。

今までのOEM生産という視点を変えて、各企業が自社ブランドを作り、それを販売していくようにすると、それぞれの市場や顧客、ターゲット層が変わっていく。

セトウチメーカーズではそれらをまとめて発信している。ライバル関係がお互いの技術やノウハウを共有して助け合う関係性になり、みんなで市場を作っていく仲間になっていった。

（幹事）

限界ポイントとして、発信力の拡がりの限界とあるが、情報発信はどういったことをし、拡がるためには何が必要と感じているか。

(香川県中小企業家同友会・大森委員代理)

情報発信に関し、セトウチメーカーズでは、メディアへのリリースと SNS での発信をしていた。メディアに関しては、注目されるものを押さえて、それに対しての仕掛けを行って発信していくことで、非常に注目力は高まっていったと思っている。当初は色々と採り上げてくれたが、2 年目になるとだんだん注目度は落ちてきた背景があったため、発信力の広がりに限界と書いた。

実際のセトウチメーカーズの活動は、着実に仲間を増やしていったり、新しい仕掛けをしたりしており、今後はやはりメディアが注目するような新しい仕掛けに取組んでいき、継続的に発信していく準備をしていると聞いている。

SNS に関しても、発信力の高いインフルエンサーと連携すれば発信力は高まっていくが、継続性が難しい。事例として東かがわ市の取組みで、地域活性化イベントが EXIT とコラボし発信すると非常に注目されたが、継続性があったかという点、課題が残っていると思う。

(幹事)

他の部会員とどのように連携する余地があるか考える。また、他の部会員にとって参考又は教訓となり得る点は何か。

(香川県中小企業家同友会・大森委員代理)

今回紹介した事例はあくまでも事例紹介なので、他の部会員に直接的な連携を求めるのは難しいと思っている。

ただ、セトウチメーカーズの取組みは四国経済産業局の発信するサイトで紹介されたり、東かがわ市は助成金申請した等々の場合はそれに協力したり、市町がセトウチメーカーズの活動を積極的に PR する形で回ったり、それぞれの立場や持っている力を生かして活動支援をしてくれたと思っている。

地域課題の解決や地域活性化の事業というのは、地域を見渡せばたくさんあると思うが、行政や大学がそれぞれの立場で、持っている力を大いに発揮して、支援していくということが 1 つのポイントだと思う。

(2) 県立三木高校との連携 (P11)

(幹事)

会員企業約 70 社とあるが、企業の場合・地域は限定されているのか (県内一円の企業か)。

(香川県中小企業家同友会・大森委員代理)

参加企業は三木高校が訪問しやすい高松市、さぬき市、東かがわ市のそれぞれのエリアに根付いている企業に限定した。

今年は高松商業高校、高松中央高校、飯山高校でも今年度実施予定であり、それぞれの学生さんに近いエリアに根付いている企業になる。中西讃の高校からも問合せが来ており、将来的には県下一円をカバーすることも可能と考えている。

(幹事)

ご両親や地域の中学生、お年寄りにプレゼンの波及効果は大きいと思うが、どう感じているか。

(香川県中小企業家同友会・大森委員代理)

令和元（2019）年から実施して今年で3年だが、実際の効果はこれからと考えている。

保護者からは子供の成長がめまぐるしい、将来の夢を見つけて勉強するようになった、うちの子どもを参加企業に就職させたいなどの意見があった。

中学生の子供に関しては、地域の中学生をインタビューシップに参加させているので、こんな先輩のようになりたいとか、地域の方からは、三木高校はこんな取り組みをしているというのがわかったとか、そういった声が上がっていると聞いているが、大きな成果はこれからである。

(幹事)

他の部会員とどのように連携する余地があるかと考えるか。また、他の部会員にとって参考又は教訓となり得る点は何か。

(香川県中小企業家同友会・大森委員代理)

こちらも同様に事例として紹介させていただいており、直接的に連携ということは、今後の各自治体の高校さんとのインタビューシップの拡がりによっては変わってくるかもしれないが、現状は難しいと思っている。

ただ、この取り組みはあくまでも地域に若者を残すためであって、地域に若者が希望を持って帰ってくることができることを目的にした取り組みになるので、あくまでもその目的を達成するための手段の1つが共育型インターンシップということになっている。

それから、この地域というのは自分たちが気づいていないだけで、視点を変えればたくさんの魅力や資源があるのではないかと私は思っている。地域の若者が地域に残りたくなるような、地域に帰ってきたくなくなるような魅力や資源というものを再発見・探究し、事業化していくことと、その事業に対し、行政や大学はそれぞれのノウハウをもって支援していく。事業を進める上でやはりどうしても弊害があるため、行政として出来るだけ緩和してもらうことが大事と思う。

地域の若者の定着にいち早く目を向けて、三木町は4月1日に中小企業振興基本条例を施行し、地域経済の担い手となる中小企業を支援していくということを明文化した。その支援を具体化していく産業振興会も5月にスタートした。おそらく各地域に中小企業振興基本条例ができていると思うので、そういったものに基づいた議論を始めることも1つのきっかけになると思っている。

3 東かがわ市 (P15)

(幹事)

限界ポイントとして、複数の主体での取り組みへの発展（特に企業との新たな連携・取り組み）があげられているが、こういったことを期待するか。また、取り組みにかかる予算規模はどのくらいか。

(東かがわ市・酒井委員)

香川大学との域学連携により、地域コミュニティ協議会の活動の支援を行っている。現在の香川大学と地域との連携から、新たな主体の参画による連携の拡大が限界ポイントと感じている。今後、地域課題を解決していくためには、複数の主体による広域的な発展の検討が必要であると考えていて、特に企業との新たな連携・取組みに期待している。連携している香川大学も色々なことを考えているかもわからないし、今後、意見交換できたらと思っている。

香川大学との域学連携の予算規模は、年間 480 万円の予算を措置している。そのなかで、出来る範囲で執行していただいている。

4 まんのう町・香川大学との連携 (P21)

(幹事)

限界ポイントとして、学生の移動が課題とあるが、具体的にどのようなことか。学生と連動する場合のポイント（保険対応等）はあるか。

(まんのう町・大藪委員)

限界ポイントとして交通手段を挙げている。学生たちとはゼミ活動の一環として、まんのう町で連携事業を一緒に進めているが、自家用車を所有していない場合や、学校の授業の一環ということで使用していない状況にある。高松市内のキャンパスから町内に移動してくるために、通常であれば公共交通機関を使って来るのがいいが、手段が限られているため、現状はゼミの教授などが送迎を行い連れてきている状況である。活動が頻繁にある時期においては、送迎の手配や、学生たちだけで自主的に町の方に来て活動することが難しいという問題が発生している。

保険に関しては、町では特に掛けておらず、対応はしていない。

(香川大学・神田委員)

授業の取組みのなかなので、学生の自家用車ではなく、大学の公用車（最大 8 人乗り）を活用して現地まで誘導し、フィールドワークに行っている。

学研災（学生教育研究災害傷害保険）などに加入していることを前提にフィールドワークに出させており、大学では保険の加入を確認している状況である。

(四国学院大学・目黒委員)

自治体の要望に応じて学習支援のボランティア活動などがあるが、学生が学研災などの保険に加入しているのはもちろん、その活動に関する保険や交通費については自治体でも考えてもらっている。学生の交通手段は、基本的には個々で行ってもらっている。

5 香川県 (P22)

(幹事)

他の部会員とどのように連携する余地があるか考えるか。また、他の部会員にとって参考又は教訓となり得る点は何か。

(香川県・久保課長補佐)

関係人口創出事業について、定住人口や交流人口以外に関係人口があるが、地域づくりの担い手が不足している状況において、関係人口も活用していきたいと考え R3 年度に実施した。デジタルの知見を有したリコー社員と小豆島で行ったが、企業や高校の学生・先生と地域課題について話し合った。小豆島以外の地域も同様の状況と思われるため、モデル事業として参考になるものと考えている。

限界ポイントに記載のとおり、外部人材と地元住民の引き合わせ役が少ないというのが課題。部会員と情報を共有して、事例を参考に活用していただいたり、引き合わせ役をご紹介いただいたりするなど、両方で活用できればと思っており、地域で助けられたらと考えている。

※事例紹介全般について特に意見等なし。

※参考資料 1 連携協定一覧等 (P33 及び別紙) で不明な点等あれば、それぞれの問合せを依頼。

議題 3 地域課題へのアプローチ等 (P23)

※資料 (P24) に基づき、地域課題へのアプローチ等について説明。

※地域課題の 1 つとして、参考資料 2 県内地域おこし協力隊の活動内容 (P34) を例示。

※資料 (P25~29) に基づき、香川大学・原委員よりアイデアソンについて説明。

(香川大学・原委員)

アイデアソンとは、人材の集合知でアイデアが広がるという発想のもとに作られており、語源はアイデアとマラソンを組み合わせでつくられた造語になる。特定のテーマについて、多様なメンバーが対話を通じて、アイデアを出し合うイベントということで、多くのアイデアを出してもらうために多用な人たちを揃えるのが、アイデアソンをやる時の基本である。いろんなバックグラウンド等を持つ人たちが集まった方が、違うアイデアが出てくるだろうということだ。アイデアソンをやるときは、基本的にはグループワークでのワークショップ形式になる。

そこでは、基本的な事だが、立場は対等で年齢などは関係なく、アイデアや意見をどんどん出してもらおう。自分と少しアイデアが違ふとダメと思っても、それを即座に批判や否定するのではなく、まずはアイデアを出してくれた人たちの意見を尊重して対話を重ねていく。もし面白いアイデアだったら、もっと突っ込んで質問し、さらにフィードバックを得ながら、もっと面白くしていくというのは非常に良いことだ。多様な考え方こそが面白く、融合などにより、良いアイデアが生まれるというところがスタートである。

ルール of 2 番目として、普段出来ないことに挑戦するのは難しいかもしれないが、最初から制限をかけずあえて挑戦することが大事だと思っており、失敗してもいいということだ。試行錯誤しながら失敗を重ねていき、その中で何か面白いものが出てくればいいくらいに考えている。

どんなアイデアが出てくるかというのは、その場に居合わせた人たちのなかから、いろんな意見が融合することにより出てくるため、もちろん最初から答えはなく、皆さんで作ろうという意味で、これが参加ルールの 3 番目になる。

アイデアソンは主にプレスリリースとアイデアスケッチからなる。まず、プレスリリースだが、

最終的にアイデアソンはここに落とし込むというのがゴールになる。そこから本当に具体的にそれをやっていくのかは、先ほど幹事が説明されたように次の段階になるため、とりあえずアイデアソンは、班ごと・チームごとに、このプレスリリースを作るところまで持っていくのがゴールになる。このプレスリリースは、例えばこの班のゴールだったら〇〇を実現のために、〇〇という課題を解決する。これまでの従来やってきた〇〇とは異なる〇〇を提供すると。ここがその一番の肝になるところで、それによってまた最初に戻ってくるのだが、〇〇の課題というのは〇〇で実現するというものを作ってもらうのがゴールになる。

※その後、実際に香川大学で行ったアイデアソンについて、「アイデアスケッチ」及び「プレスリリース」のスライドを基に説明。

（東かがわ市・酒井委員）

確認だが、アイデアソンに取り組むことはいいし、やっていけたらと思っている。しかし、香川大学・原委員の説明のなかで、今の段階では、地域課題という大きな範囲でしか示されていないが、もう少し具体的にテーマを絞るのか。

（香川大学・原委員）

その通りで地域課題だと大きくなる。活性化のためなどだと少し大きくなるため、どのあたりまで絞り込んだらいいかというのは、打ち合わせが必要だと思う。県地域活力推進課と話し合っていくと思うが、アイデアソンは香川大学が中心で運営なども当日させてもらえたらと思っており、それは県にお伝えしているが、課題を決める場所では、少しすり合わせが必要だと思うので、ここに参加されている方々にあらかじめお示しする必要があると思う。

（幹事）

テーマは大事で、ただプラットフォーム自体が若者の定着という主旨・ねらいがあるため、大きくは外れることはないとはイメージしている。ただ、地域課題というざっくりした分ではいけないし、地域活性化は非常に広い概念でつかみどころがないというのも、この前の第1回でもお話いただいたところであり、なるべくそこは避けながら若者の定着を軸に、また皆様にご相談しながらアイデアソンに移っていけたらと感じている。

（高松市・齋藤委員代理）

実施にあたり何点か確認したい。

テーマの話もそうだが、自治体職員を各市町1人出すということで公務扱いになるのか、また、若い職員はどれくらいの年齢を指すのか。

地域おこし協力隊の任期中の者がいない場合、協力隊の失敗例もあるが、元地域おこし協力隊などでもよいのか。

アイデアソンに参加する者に対する報酬はどのように考えているのか、アイデアソンを行って5年度以降の取組みを考えるというスキームであるのかの確認がしたい。

(幹事)

感覚的なものであるが、公務であると考える。20 歳代に限る必要もない。協力隊の参加が必須ではない。アイデアソンの結果を今の段階で事業化できるかはわかっていない。議論を重ねて秋頃には判断できると考えている。企業が参加するのは本業に穴が開くし、保証の話もある。

協力隊 0B が参加する場合、事前説明が必要か。その際、何のためにするのかを説明する必要がある、どう説明するのか。この場で説明できるものは説明し、決められないなら後日検討する。

(香川大学・原委員)

30 代・40 代だろうと多様な人が集まる主旨である。

報酬は反対である。取組みをやることになったとき、お金をもらってやるのではない。同じ思いをもって取組みをするということである。

(香川県中小企業家同友会・大森委員代理)

当会の会員は、自社の企業づくりを進めていくことが地域づくりに繋がっていると考えている。地域の未来を考えることは自社の未来を考えることと同様。こういう活動に理解いただいているので報酬は不要で問題ない。

(坂出市・松良委員代理)

ゴールが見えていない。新しい連携協定を結ぶためのアイデアソンなのか。個々の連携はしているが、新しい個々の連携を検討するのか。それとも既存の連携の質の向上なのか。3 つぐらい考えられるが、どれになるかで参加者やテーマが変わってくると思い確認した。

(香川大学・原委員)

2 番目を中心と考えている。過剰に期待され、アイデアソンをやると何かアイデアが出るかというプレッシャーになるが、試行錯誤の余地は残させていただけたらと思う。

(丸亀市・窪田委員)

坂出市が言うように、結果の考え方が必要である。地域課題をあぶり出し、アイデアソンをやるにあたって、内容を詰めていく機会が必要と考えている。

(東かがわ市・酒井委員)

丸亀市、坂出市と同感である。

(坂出市・松良委員代理)

地域課題に対してアイデアソンということではなく、自治体との連携協定がより良いものになるようなアイデアソンか。

(香川大学・原委員)

そういうこともできるが、今回は人口減少という明確な課題に対して行うと考えていた。

もっと細かいテーマでアイデアソンをやるべきだという考え方はあると思うが、地域課題をわれわれが発見していないというのは違うと考えている。

(幹事)

第1回の部会では、地域課題についてこういったことは関われる、というのを共有した。テーマをがっちり決めてという1番ではなく、2番で原委員と同じテーマ設定の考えである。

(香川大学・原委員)

テーマ設定は大事であり、私も少し軽く考えていた。

7月4日に小豆島で「新しいビジネスが生まれそうな小豆島をめざして」というテーマでアイデアソンを行うことになっており、参加いただいても構わない。

※資料(P30)に基づいて、アイデアソンの実施案について説明。

議題4 令和4年度の実施スケジュール等

※資料(P31, 32)に基づいて、令和4年度の実施スケジュール等について説明。

(高松市・齋藤委員代理)

アイデアソンのやり方は具体的に提示いただけるのか。内部で説明するためにも、もう少し詳しい資料が欲しい。

その他

(幹事)

運営委員会の資料について、第1回、第2回の部会資料が基本となるが、他の部会の資料とのバランス等もあるため、案を作って皆様に確認いただく予定である。

事務局が大きな予算組みを説明すると聞いている。地域活性化部会の予算がいくらというような話を聞いておらず、区分経理はしていないようだが、事務局の考えでお任せするということがよいか。(意見なし)

以上